

## ローマの『共和制』の起源について

鈴木 一郎

### 共和制以前のローマ

Titus Liviusの神話的な伝承によれば、ローマの建国は、紀元前753年。この年からローマ暦は始まっているが、次第に王政が形成され、『共和制』は紀元前509年の革新によって成立し、紀元前31年までの間、約五世紀の間、続いている(Titus Livius, 59 B.C.-A.D. 12, 『ローマ建国史』 *Ab Urbe Condita*)。

共和制をあらわす *res publica* は、字義通りに解すれば、国家は「民衆の (*publica*) もの (*res*)」の意であり、これは支配者中心の「王政」、「僭主制」、「貴族政治」などに対する「民衆の政治」を表現している。その展開をローマ史の前半から見よう。

伝説によれば、Laurentumの王Latinusは、Trojaから亡命したAeneasを暖かく受け入れ、娘Laviniaと結婚させ、Latiumの首都Laviniumを設けたという。リヴィウスによれば、その一方で、Alba王の系譜が続いている。Albaの町はAscanius Iulus (AeneasとLaviniaの子)が作ったといわれ、Atys, Capys, Capetus, Tiberinus, Agrippa, Proca, NumitorなどAlba系の諸王の名前が列記されている。これは、Albaの町の人々がローマ市へ移住していったことを示している。

またSabini族の町Curesの王Titus Tatiusの頃には、同地からも、多くの住民がローマに来ている上に、Tatiusは、Romulusと共に、ローマの初代の王となっている。

更に、Romulus のローマ市建設以後は、Numa Pompilius (Cures 出身、715-673 B.C.)、Tullus Hostilius (673-642 B.C.)、Ancus Marcius (642-617 B.C.) 等ローマやサビーニ系の王が続き、次いで三代に渡る Etruria 系の Tarquinius 家の支配が記録されている。

リヴィウスの古代王政期の記録については、その当否に関して諸説があって、神話的なものが挿入されていることは事実であるが、それにも関わらず、次の点は考慮に値する。

1. Latium と呼ばれる地域には、ラテン語で Aborigines と称する先住民の集落があった。
2. そこにギリシャ系(?)の亡命者、移住者等の外来者が来てローマに定住した。
3. 更に、Alba, Cures, Etruria, Sabini など周辺の住民のローマへの移住者が増える。
4. Romulus と Titus Tatius の共同統治 (753-715 B.C.) の例が示すように、これらの移住者とローマを建設した部族 (tribus) は度々抗争状態を繰り返しているが、同時に平和共存の方式を模索している (これは後の二人の Consul 制の原型か)。
5. ローマ市の市民は Romulus 系の Ramnes (Rhamnenses) グループと Sabini 系の Tities グループと、Etruria 系の Luceres グループに分けられ、この三つの (tri-) 部族 ( $\Phi\upsilon\lambda\eta = \text{tribus}$ ) のそれぞれの族長が tribunus であった。
6. この三つの tribus は Servius Tullius (578-510 B.C.) の時に、四に増加され、その他に郊外の農地の21の tribus (後には 31 になる) が加えられている (Tribus urbanae と Tribus rusticae)。
7. この初期の三部族の指導者が Tribuni (Tribunus の複数) である。
8. この Ramnes (Latium 系)、Tities (Sabini 系)、Luceres (Etruria 系) の三部族から Romulus は、各 100 人の騎士からなる Centuria 三グループを造っている。

9. Servius Tullius はローマ市民の Census を実施しているが、そのことは、その時期までにローマはかなりの人口の都市になっていたことを物語っている。

そのCensusの内容は軍事を目的とするものであって、まだローマが周辺の部族との抗争に備える必要があったことを示している。リヴィウスによればTulliusのCensusの内容は次のごとくである。

I. Classici	80 centuriae		
(100,000 asses 以上の資産)	40 centuriae (17-45才)	iuniores (戦闘員)	
	40 centuriae (46-60才)	seniores (防衛)	
II. 75,000-100,000 asses	20 centuriae		
	10 centuriae (17-45才)	iuniores (戦闘員)	
	10 centuriae (46-60才)	seniores (防衛)	
III. 50,000-75,000 asses	20 centuriae		
	10 centuriae (17-45才)	iuniores (戦闘員)	
	10 centuriae (46-60才)	seniores (防衛)	
IV. 25,000-50,000 asses	20 centuriae		
	10 centuriae (17-45才)	iuniores (戦闘員)	
	10 centuriae (46-60才)	seniores (防衛)	
V. 11,000-25,000 asses	30 centuriae (投石器を持つ)		
VI. Proletarii (11,000 asses 以下)			
	1 centuriae (軍役を免除された)		

10. このCensusと軍制から見ると、Serviusの頃の戸数は、17,100戸位であるから、奴隷を除いた人口はその倍以上あったことになる。この数字が正しいかどうかについても諸説あるが、ともかく、こうしたCensusや住民の登録がなされる程の規模にローマ市が拡大されていることが分かる。(ローマの戸数は、465 B.C.には124,214、460 B.C.には132,049となっている。)

11. すでにRomulusは占領したローマ周辺の土地を三分して、(1)祭儀用地、(2)公有地、(3)三部族それぞれの居住地に分け、更に、最高年令者や経験を積んだ者、百名を選出させて、彼らを国政に関する審議に加えて

いる (Senatores, Patres)。

このように Romulus は、外来民族をローマ市民として受け入れ、それらを Tribus の形で定住せしめたばかりでなく、その代表者を入れた元老院の原型を造っていたことになっている。この伝承はローマが共和制に入る以前に既に、Senatus や、Tribunus をもち、百人会 (centuriae) のような市民組織を備えていたことを物語っている。

ローマの王政最後の王は Etruria の Tarquini i 出身の Tarquinius 一族の三代目の Tarquinius Superbus である (その名は夏目漱石にも「タルキンの三代目」という表現ででてくる)。Superbus は「傲慢」を意味するので、ローマ史の中では、伝統的に「悪役」となっているが、リヴィウスもいっているように、近隣の Latium の諸都市を併合し、カピトリヌスの丘に Jupiter の神殿を建て、Gabii (ローマの東 20km) の町と条約を締結している (その条約原文は、前一世紀の Augustus 帝の頃に Semo Sancus の神殿に保存されていたという) から、ローマ市の拡大には大いに貢献した人物であったらしい。Superbus は後の史家が共和制を誇示するために付けた仇名であろう。その治世は前 534-510 となっている。その同じ年にアテナイでは僭主ヒッピアスが追放され、僭主制が崩壊して、平民党のクレステネスが支配権を握っているので、リヴィウスはローマ史をギリシャ史に合わせているとみる見方もあるが、このあたりからの記事はかなり史実に近いものと見てよいであろう。(アテネのヒッピアスの方は、その後ペルシャに亡命して、前 490 年、ペルシャ軍と共にギリシャに攻め込み、マラトンで戦死している。) リヴィウスは、このギリシャの諸都市における王政から民主制への移行の時期を、Tarquinius の言葉として「王追放の流行」(ii, 9) といっている。

## 共和制の誕生

王政の崩壊と共和制の誕生のきっかけとなったのは、Tarquinius Superbus

に対する民衆の反抗や蜂起によるものではなかったようである。それはトロヤ戦争の場合と同様、一人の女、Lucretiaをめぐるスキャンダルが原因であった。

Lucretia は Tarquinius Collatinus の妻であったが、王 Superbus の息子の Sextus がこれを犯し、Lucretia はこれをその夫に告げて自殺したとリヴィウスは記している。この記事が史実であるか否かについては、定かでないが、もしそうであるとするならば、この事件は Tarquinius 一族内部の抗争で、王政排除はこれを利用した Lucius Iunius Brutus の政略であったことになる。しかし王一族ならびにローマの特権階級が王政を利用してかなり身勝手な行動をしていたことは想像できる。

前 509 年に共和制となり、Tarquinius Superbus とその一族はローマから追放されているが、Lucius Tarquinius Collatinus は Lucius Iunius Brutus とともに初代の両コンスルになっている。前者は同じく Tarquinius 家に属するという理由で同僚のコンスルのブルトゥスによって自発的にローマを立ち去るようにと勧告され、以後 Tarquinius 一族は、王政復古のために何回かローマ市と対立している（これもギリシャの ostracism からとったものという説がある）。

リヴィウスによれば、二人のコンスルが任期たった一年で共同統治する方式は、「人（王個人）の権威よりも遥かに強力な法（制度）の支配（*imperia legum*）の下にローマ市の政治を置こうとした意図によるもの」とされている。次にリヴィウスのコンスル制についての見解を原文（ii, 1）から引用しておく。

「自由（共和制）の起源は、王政時代からの支配の権限縮小ではなしに、両コンスルの権限の行使を、一年間に限定した点にあることは念頭に置いて欲しい。王政時代の全権限（*iura*）とその行使のシンボル（*signia*）は、初期の両コンスルの手に握られていたが、両コンスルが（支配の印の）ファスカス（*fascēs*, 処刑の斧と苔刑の棒の束からなる）を掲げること

により、その脅威が倍加するのではないかと恐れ、そうならぬように注意を払っている。それが市民の融和や元老と市民との連帯感を形成するのに、どれ程役だったかは驚異に値する。」

この一節に見られるのは、強力な政治を「悪」とみる考え方である。戦争や社会的動乱の時期には、強力な指導力が求められるが、あまりにも強大な権力の形成は、汚職や腐敗の構造を形成することは、歴史の証しているところである。専制君主制や独裁制、軍政などはその例であろう。それは現在も「一党独裁制」や、長期に渡る「一党支配体制」が民主主義とは逆行する形になるとして批判されているから、昔の話だけではない。

ローマの場合、先の *tribus* に示されているように、亡命者や移住者のグループがそれぞれの権益を守る *tribunus* 制を作っており、「自由化」とか「民主化」に際しても、これらのグループの利益に対する配慮がなされねばならず、同時に支配体制の側の権限拡大を阻止する方策が、二人のコンスルによる権限の分割や、たった一年の任期の制度、および百人会 (*comitia centuriata*, 後の元老院であろう) などによる民衆の声を聞く体制の形で形成されている。永い武家政治の伝統の中におかれた日本には、この支配者の権限の制限・縮小といった観念は皆無に等しい。ただし「禁中並びに公家諸法度」(1615)のように、天皇や公家の権限の規制は見られるが、これによって民権が保護されたわけではない。

### 聖なる権威と俗の権威の分離 (The Sacred and Secular Authorities)

古代ローマの王政時代には、王は同時に公的祭儀の執行人でもあった。いわゆる神権政治 (*theocracy*) である。共和制への移行に際してもこの公的祭儀 (*publica sacra*) を誰が行うかが議論されている。権力者が「人間」である以上、なにか超越的、絶対的な存在にその支配者としての大義名分を求めるのは何時の時代にもあることだが、「世俗的権威」と「聖なる権威」の結合によって、問答無用の「絶対権」が形成されることは、危険である。そこでローマでは、この「祭儀を執り行う者の長」 (*rex*

sacrificorum) を設置して、これらの祭儀執行者 (sacerdotes) の祭祀長 (pontifex, 「橋を造る者」の意。神と人との仲介者であろう) を設けている (これは始め 4 人、次いで 8 人、更に後には 15 人となり、その長は Pontifex Maximus と呼ばれた)。リヴィウスはいう (ii 1)。

「それは、付け加えられた (司祭という) 身分 (honos, 榮譽) が、市民の関心の中心事であった自由を阻害せぬようにとの配慮からであった。」

これは形式的にはあるが、世俗的な権威と宗教的権威を分ける政教分離方式の確立を指向している。とかく宗教や思想と、政治の区別が論議されている昨今、初期ローマのこの配慮は考慮に値する。後に西欧中世以後、ドイツ皇帝 (secular authority) はローマ教皇 (sacred authority) の加冠を受けてはじめて神聖ローマ皇帝という大義名分を獲得しているが、これに似たケースは日本の将軍にも当てはまるかもしれない。実力行使で事実上天下人となった頼朝も、家康も、朝廷から征夷大將軍の称号を受けてはじめて幕府を開いている。ただし、天皇がローマ教皇のような、宗教的な存在であったか否かは、論議の余地があるが、征夷大將軍という官位の授与の形で、実質的な天下人に「大義名分」が与えられることが、権力確立のために必要であったことは間違いない。この点は十六世紀以来、来日した西欧の知識人によって度々指摘されている。

### コンスルの制度

この初期のコンスルの制度には、時のたつに連れて更に複雑な規定や手続きが出来あがっていったようである。元来牧場であった広場 (Campus) は百人会 (Comitia Centuriata) の会合の場所で、軍神 Mars の祭壇があつて、練兵場 (Campus Martius) でもあつた。ここで毎年、コンスル二名の選挙が行われた。しかし、そのほとんどは patricians (貴族) から選出されていたが、前 388 年以降、コンスルの一人は plebeians (元老以外の者) から選ばれることとなった。時には二人とも plebeians から選出されている。

コンスルの候補者は43才以上の者に限られ、この年令を *legitimum tempus* (適齡) と呼んでいる。候補者は私人(個人)として選挙場に出席し、従者や取り巻き(派閥?)を連れて入ることは禁止されていた。また原則として、候補者は財務官(*Quaesor*)、造宮官(*Aedilis*)、執政官(*Praetor*)などの職を辞任しなければならなかったが、時にはこれらの要件は無視されている。たとえば、*M. Valerius Corvus* (348 B.C.) は23才、*L. Cornelius Scipio* は24才でコンスルになっている。若い頃の *C. Marius* (107 B.C.) や、*Cn. Pompeius Magnus* (70 B.C.), *C. Octavianus* (38 B.C.) も43才以下でコンスルになっている。*Pompeius* は *Quaestor* でも *Praetor* でもなかった。

コンスルの権限には、これを規制する上級の権威者はなく、リヴィウスのいうように、神と「法」がこれを支配することになっている。しかし、コンスルの任期終了後、その行動は市民によって、細部にわたって調査され、不正行為があった場合には、しばしば法によって厳しく処罰されている。

初代のコンスル、*Lucius Iunius Brutus* はリヴィウスによれば、*Tarquinius* 一族の陰謀に加担したという理由で、自分の子供を処刑している。

コンスルの権限の象徴は *praetexta* とよばれる紫の縁取りのついたトガ(*toga*)であったが、後には色のついたもの(*toga picta*) または橄欖の葉が描かれトガ(*toga palmata*)に変更された。またコンスルの前方には、その権限の象徴である *fascēs* と12人の従者(*lictores*) が先導した。*fascēs* の斧や棒は、処刑をあらわすので、王政から解放された共和制の象徴には相応しくないというので、*Valerius Publicola* (509, 508, 506-504 B.C. Consul) はこれを廃止したが、つぎのコンスルはこれを復活している。

二人のコンスルは、ローマにいる時には、毎月、交代で、*lictores* の先導でその任についた。これはリヴィウスのいうように、二人のコンスルの存在によって、王政時代からの支配者の権限が倍加するのを民衆が恐れたからである。先ずコンスルの一人が、ふれ役(*praeco*) の先導で公衆



の前にあらわれ、lictors は fasces を持たずに、その後には随行した。

両コンスルの権限は平等であったが、ヴァレリウスの法ではコンスルの中、年長者に優先権があたえられていたが、ユリウスの法では子供の沢山いる方のコンスルが優先することになっている（*consul major, consul prior*）。

コンスルの権限は絶対的であって、元老院の議長を務め、その招集、解散権をもっていた。元老院のメンバーはコンスルへの助言者、顧問であった。

年号は、二人のコンスルの名を列記する形で表記され、たとえば、*M. Tull. Cicerone et L. Antonio Consulibus* とあれば、A.U.C. 691, すなわち前 63 年を指す。この習慣は帝政時代にもつづいていたが、後 541 年 (A.U.C. 1294) に Justinianus 帝によって廃止されている。

共和制の当初は、ローマはまだ Latium の一都市で、コンスルの権限もこの小地区に限られて行使されていたが、その後、前三世紀中葉にはローマはイタリア半島の覇者となり、更に前二世紀には、カルタゴ（西）やマケドニア（東）との戦いに勝ち、地中海世界の覇者となった。コンスルの権威もローマ市だけではなく、この広大な地域に拡大されていった。そうになるとその権威の象徴である *scipio eburneus* が登場する。公的な集会ではコンスルは象牙の椅子に坐り、先端に鷲の像をつけたこの象牙製の棒（笏のようなもの。笏も束帯着用の際に右手にもち威儀を整えた板切で、もと、これはその裏に紙を貼って、儀式次第などを書き、忘備に備えたという）をその権威と権力の象徴として手にもった。

前一世紀には、ローマは更に黒海方面のバルチア (Mithridates) やアルメニア (Tigranes) 地方に軍を進め（その指揮官が Pompeius Magnus）一方、それまで未開の地であったガリア（ほぼ現在のフランス）、ヘルヴェチア（現在のスイス）、ブリタニア（英国）など西北部にローマ世界を拡大していった（その指揮官が Julius Caesar）。

伝統的にローマのコンスルは、共和制の始めから戦いの際には、コンスル自らが指揮官として戦場に赴いている。コンスルの任期中にその担当する地域に赴く際には、籤によってその担当地区が決められ、その後、カピトールの丘で神々にローマへの守護を祈り、それから、軍服に着かえ、lictorsを先導させて出発した。その担当地区の決定は、時には籤によらず、元老院によってなされている。

一度任地に赴いたコンスルはその後任が到着するまでローマに戻ることは許されなかった。しかし帰国するや、大演説をして民衆に、ローマの法や国益に反するようなことはせず、ひたすらローマの榮譽と安寧のために尽くしたことを強調している。

原則としてコンスルは任期終了後二年間は再度コンスルにはなれないことになっていたが、すでに共和制当初には Publius Valerius Publicola (509, 508, 506, 504, B.C.) が、更に C. Marius (104-100 B.C.) が再任されている。

共和制の時期には、このように絶大な権威をもっていたコンスルの職も、帝政期に入ると、名称だけが温存され、その権威を失い、形式だけのものになっている。J. Caesar の頃には、一年だった任期が二、三カ月に縮小されている。一月一日に正式にコンスルになった者は、consules ordinarii (正コンスル) とよばれ、その名で年号を示したが、後任の者は consules suffecti (代理コンスル) に過ぎなかった。Tiberius (A.D. 14-37) や Claudius 帝 (A.D. 41-54) は更に任期を短縮しており、Commodus (A.D. 180-192) は一年間に 25 人ものコンスルを任命している。これをもとの任期一年にもどしたのは Constantinus 大帝 (311-337) であった。

コンスル名による年号の呼び方は、帝政期にも続けられていたことは、この例からもわかるが、最終的には A.D. 541 年 (A.U.C. 1294) まで継続し、東ローマ帝国皇帝 Justinianus I 大帝 (527-565) の時に公的に廃止されている。ローマではキリスト教が公認され、さらに国教となり、次第

にユリウス暦が使われるようになり、Charlemagne（768-814）はこれを公式に採用しているが、その頃からキリスト紀元もこれと併用されることとなる。それまでのキリスト教徒は、Eusebius（260-340）が設定した Abraham の誕生の時、すなわち前 2016 年の 10 月を紀元とする Abraham 暦を使っていたという。

しかし共和制の政治体制がつねに安定していたわけではない。次の表は時にコンスルの制度にも動揺があったことを示している。

B.C.	
509-491	共和制の成立。毎年二人のコンスルが執政
490-489	<u>Marcus Coriolanus</u> の反乱
488-452	コンスル執政
451-450	十人執政 ( <u>Decemviri</u> )
449-445	コンスル執政
444	コンスルに代わり主要な tribus の指導者 ( <u>Tribuni Militum</u> ) が執政
443-439	コンスル執政
438	<u>Tribuni Militum</u>
437-434	コンスル執政
433-432	<u>Tribuni Militum</u>
431-427	コンスル執政
426-424	<u>Tribuni Militum</u>
423	コンスル執政
422-414	<u>Tribuni Militum</u>
413-409	コンスル執政
408-394	<u>Tribuni Militum</u>
393-392	コンスル執政
391-377	<u>Tribuni Militum</u>
376-372	コンスルも <u>Tribuni Militum</u> もなく、 <u>無政府状態</u>

<p>三つの tribus は、Ramnes, Tities, および Luceres. Tribuni Militum は Tribuni Consulares と呼ばれた。</p>
--

- 371 Tribuni Plebis (平民指導)
- 370-369 Tribuni Militum
- 368 Dictator (非常事態の軍政官)
- 367 Tribuni Militum
- 366-324 コンスル執政
- 324 Dictator
- 323-310 コンスル執政
- 309 Dictator
- 308- 60B.C.コンスル執政
- 59 B.C. Julius Caesar (コンスル一名)
- 58- 56 三頭政治 (Triumviri)
- 55- 31 コンスル執政 (以後、ローマは帝政期に入る。コンスルは名目的となる。)

### 共和制のローマ

ローマはラチウムの都市国家として誕生した。そして王政から共和制に移行するのは、前 510/509 年頃であるが、前 496 年にはすでにラチウム諸都市の連合軍を破り、前 493 年にはラチウム同盟と協定を結び、更に三次にわたる対サムニウム戦争 (343, 326, 298 B.C.) によって、中部イタリア半島の覇者となった。ついで三次にわたる対カルタゴ戦争 (264, 218, 150 B.C.) の結果、イタリア半島のみならず、シシリー島、カルタゴから西地中海を支配する。また、東地中海を支配していたマケドニアとの戦い (215, 200, 171, 149 B.C.) によって、当時最も文明の進んでいた「地中海世界」の覇者となった。

国内では「王政」を排除し、政権を貴族の独占から、次第に民衆の参加 (貴族以外の者もコンスルになっている) の形に変え、国家は「民衆の物」 (RES PUBLICA) と見做したローマの人々も、前二世紀には、占領地区を「属州」として、多量の軍隊を国外に派遣し、それらの地区から収奪した穀物や物資で、繁栄するが、一方では、増大する進駐軍経費のため、物

価は上昇している。ポエニ戦争の時には、ローマは同盟国諸都市に軍事費や軍艦建造の割当を行っている。民衆は国内では、まだ民主主義が作動していると思っていたが、対外政策には、全くこれと反する感覚で対処していた。民衆のモラルは低下し、東方から導入されたバッカスの祭りの影響で、性道徳は腐敗し、すでに前 186 年にはこれを禁止する法案 (Senatus Consultum de Bacchanalibus) が可決されている。その頃のローマの喜劇作家プラウトゥスやテレンティウスの作品の中には、それを風刺したものが見られる。

赫々たる戦勝にもかかわらず、ローマ人は派手な消費生活に慣れ、物価は上昇し、ローマの貨幣価値は下落し、悪貨が鋳造されている。

それにもかかわらず、ローマは兵をイベリア半島 (147, 143 B.C.) や北アフリカ (113, 111 B.C.) に派遣し、ギリシャではアカイヤ同盟を撃破し (146 B.C.)、小アジア (133, 129 B.C.) を属州と化し、北方ゲルマン族のキンブリ (Cimbri) やテウトネス (Teutones) 等のゲルマン族と戦い (105, 102 B.C.)、更に、東方の大国であったパルチア (Parthia, 黒海方面のスキチア系の国) のミトリダテス (Mithridates, Pontus の王、135 - 63 B.C.) と三次にわたって戦っている (89, 83, 74 B.C.) が、パルチアはその後帝政期に入ってもローマとは対立する大きな勢力となっている。

しかしこうした大国意識と権力行使は、国内で頻発する奴隷の反乱や、マリウスやスラの権力闘争、さらにクラッススの汚職事件、ポンペイウスとカエサル、オクタヴィアヌスとアントニウスなど一連の政治的対立の図式を形成し、カエサルはガリアからブリタニアまで遠征したにもかかわらず、ローマ自体の政治は破局に瀕し、結局、五百年の伝統を誇ったローマの共和制は終焉を告げるのである。

### リヴィウスと共和制の終焉

リヴィウスの『ローマ建国史』は神話的な王政ならびにそれ以前の記述 (第一巻) を除くと、まさに五世紀に渡る『共和制ローマ史』 (509-31 B.C.) の集大成ともいえるべきものである。

それがローマが共和制から、また帝政に移行しようとしている時期に書かれている点は注目し得る。それはまさに地中海帝国であったローマが、西欧世界を包含するヨーロッパ帝国に変容しつつある時期であった。

リヴィウスは前59年頃、イタリア北部のパタヴィウム（Patavium、現在のPadua）で生まれたが、それはカエサルが第一回のコンスルを勤めた年にあたる（没年は西暦後17年）。

その生涯はホラティウス（65-8 B.C.）やヴェルギリウス（70-19 B.C.）などの文人、詩人が輩出したローマ文学の黄金時代であると同時に、初代の皇帝アウグストゥス（オクタヴィアヌス 63 B.C.-A.D.14）の年代と重なっているばかりでなく、アウグストゥスとはかなり親しい関係にあったことは、皇帝がリヴィウスを「ポンペイウス派」（共和派）とあだ名していることから理解される（Tacitus, *Ann.* IV. xxxiv）。

ホラティウスも、アテナイに留学中にかのブルートゥスの軍に加わり、前42年、フィリッピの戦いでアントニウスに敗れ、その財産を没収される憂き目をみているが、翌年、恩赦によりローマに戻り、財務官の事務官（scriba）になっており、その後、前31年、アクティウムの戦いの後、オクタヴィアヌスの権威が高まり、前27年、元老院からオクラヴィアヌスにアウグストゥスの称号があたえられるや、ホラティウスは皇帝の秘書官となるように要請されるが、これを謝絶している。ホラティウスも「共和派」だったから、節を曲げて「皇帝」に仕えることはできなかったのである。前17年のローマ大祭にアウグストゥスのために大祭詩をつくったこと位が皇帝に対するただ一つの協力であった。

同様、「ポンペイウス派」のリヴィウスも、ローマ伝統の共和制を支持していたようで、その歴史を高く評価しているが、帝政の新体制には馴染めなかったようである。アウグストゥスがこのような「反体制派」の詩人や歴史家を、その友人として迎えていることは過渡期にあるローマを考える場合に重要であろう。

リヴィウスの生まれたパドゥアはその頃、北イタリアの交易の中心地であって、特に羊毛の取引が盛んであった。ポー川の平原にあるこの町は運

河によってアドリア海と繋がっていたのである。アウグストゥスの頃にはローマについて、イタリアでも最も繁栄していた町であった。かなりの数のローマの騎士 (equites) が駐在していた。その住民は一時は二万の兵力を備えていたという。リヴィウスの頃、アスキニウス・ポリオ (Assinius Pollio) が前 43 年、パドゥアに圧力をかけているが、それはパドゥアがアントニウスに反抗したからであった。前 49 年には、リヴィウスはまだ 10 歳位であったが、その頃すでにパドゥアはローマ領に編入され、市民はファビウスの支配下に入っている。

しかし、当時ローマはすでに地中海世界の覇者となり、ローマ市民は傲慢になり、その道義は頹廢の傾向を見せていたのに対して、パドゥアでは、まだ伝統の質朴な道德観が支配していたようである (Plinius, Epist. I. xiv. 6)。

またパドゥアは文学活動のセンターでもあった。リヴィウスの他にアスコニウス (Quintus Asconius Pedianus) やパエトゥス (Thraseas Paetus) などの文人が輩出している。クインティリアーヌス (Quintilliaus) は、ローマのわざとらしい技巧を凝らした作家の言葉遣いに対して、パドゥアでは直截かつ簡明な言葉を話すとして、これを「パドゥア風」(Patavinitas) と呼んでいる。

ローマに赴いたリヴィウスがこのような奢ったローマの気風に馴染めなかったのは理解できる。リヴィウスが『建国史』を書き始めるのは、前 27 年、32 歳頃とされているが、それはまさに「共和制」が終焉を告げ、「帝政ローマ」が開幕した時点であった。この時期に五百年にわたる伝統の「ローマ共和制」の歴史を書いたリヴィウスの胸の中には、奢るローマ人に対して偉大な「共和制」の意味をもう一度、説いて聞かせたい気持ちが宿っていたのではあるまいか。

その歴史の記述の中には、史実としては疑わしい英雄的な物語が挿入されているが、これも「共和制」を理想化しようとするリヴィウスの心情の表現であるとみるならば、理解できるであろう。それはリヴィウスの一つの「歴史観」といえるかも知れない。

この前一世紀にはユーラシア大陸東西両極に「漢帝国」と「ローマ帝国」という後世に大きな影響を残した文化圏がその全盛期を迎えている。現在使用されている「漢字」や、「ローマ字」の書体（隸書、楷書、ABCのアルファベット）もこの頃形成されている。そして中国でも前漢の史家、司馬遷（145-c. 86 B.C.）が『史記』130巻を完成し、ローマではリヴィウスの『ローマ建国史』142巻が刊行されているのは、興味深い。

『史記』の中の本紀、世家、列伝の三区分は、帝王、諸侯、著名人の伝記であって、社会的地位による区分であって、歴史と伝記を併せた「紀伝体」になっているが、その人物描写の中には、著者の価値判断もかなり取り入れられていて、後世の中国の歴史記述の基本となる型を提供しているが、リヴィウスの『ローマ建国史』は「編年体」であって、共和制初期の記述などは、まさに毎年の主要な出来事を年毎に纏めていて、chronicleの型を提供している。その価値判断の基準にあるのはどこまでも「共和制」の理念であった。

しかし、リヴィウスが皇帝アウグストゥスとかなり親しい関係にあったのに対して、司馬遷は武帝の時に、郎中、太史令等の職についていたが、親友の將軍李陵の匈奴への投降事件を弁護して武帝によって宮刊に処せられ、その恥辱の中で『史記』を書いている。

激しい政治形態の変化が、社会主義国を中心として展開している現在、もう一度、古代の「自由」や「共和制」の理念に遡って考えることは、問題の本質を検討する上で重要な課題であると思われるので、ここにその初期の理念について概説しておく。共和制の終焉までの大要を知るための参考資料として、共和制に入るまでの半神話的な王政時代と、共和制以後のコンスルの年表をリヴィウスをもとに作ってみたので、付録として付け加えておく。

**（参考文献）**

Tite-Live: Histoire Romaine, Paris, Société d'Édition « Les Belles Lettres », 1975

J. Lemprière: Classical Dictionary of Proper Names mentioned in Ancient Authors with a Chronological Table, London & Boston, Routledge & Kegan Paul, 1972



## 共和制以前の古代ローマの支配体制

(Titus Livius による)

1. Latinus (Laurentium, 現在のチベル川河口東岸の Paterno の王。  
その住民は Aborigines とよばれた)
2. Aeneas (トロヤ戦争の難民とされている)

ALBA

3. Ascanius (Iulus. Aeneas と Lavinia の子)
4. Aeneas Silvius
5. Latinus Silvius
6. Alba Silvius
7. Atys (Atia 族の祖)
8. Capys (Alba 王)
9. Capetus (Alba 王)
10. Tiberius Silvius (Latium 王)

ROMA (14王, 420年間)

11. Agrippa Silvius (Latium 王、33年間在位)
  12. Romulus Silvius (Alba 王)
  13. Aventinus (Alba 王)
  14. Procas (Alba 王)
  15. Numitor (Alba 王)
  16. Amulius (Alba 王)
  17. Numitor 2 (Alba 王)
  18. Romulus/19. Titus Tatius (753-715 B.C.) の共治。 38年間
  20. Numa Pompilius (715-673 B.C.) 42年間
  21. Tullus Hostilius (Cures) (673-642 B.C.) 31年間
  22. Ancus Marcius (642-617 B.C.) 35年間
- TARQUINIUS 一族の支配
23. Tarquinius Priscus (616-578 B.C.)
  24. Servius Tullius (578-534 B.C.)
  25. Tarquinius Superbus (534-510 B.C.)

## 共和制ローマのコンスル年代表

(Titus Livius の『ローマ建国史』 - Ab Urbe Condita - より)

B.C.			A.U.C.
509	Lucius Iunius Brutus	Lucius Tarquinius Collatinus	245
	Lucius Iunius Brutus	Publius Valerius Publicola 1	
	Spurius Lucretius	"	
	Marcus Horatius Pulvillus	"	
508	Titus Lucretius	" 2	246
507	Spurius Larcius	Titus Herminius	247
506	Publius Lucretius	Publius Valerius Publicola 3	248
505	Marcus Valerius	Publius Postumius 1	249
504	Titus Lucretius 2	Publius Valerius Publicola 4	250
503	Agrippa Menenius	Publius Postumius 2	251
502	Opiter Verginius	Spurius Cassius	252
501	Postumius Cominius	Titus Largius	253
500	Servius Sulpicius	Manius Tullius	254
499	Titus Aebutius	Gaius Vetusius	255
498	Quintus Cloelius	Titus Larcius	256
497	Aulus Sempronius	Marcus Minucius	257
496	Aulus Postumius	Titus Verginius	258
495	Appius Claudius	Publius Servilius	259
494	Aulus Verginius	Titus Vetusius	260
493	Spurius Cassius 2	Postumus Cominius	261
492	Titus Geganius	Publius Minucius	262
491	Marcus Minucius	Aulus Sempronius	263
490-489	[Marcius Coriolanus の tribuni に対する反乱]		264-265
488	Attius Tullius	Gnaeus Marcius	266

487	Titus Sicinius	Gaius Aquilius	267
486	Spurius Cassius 3	Proculus Verginius	268
485	Servius Cornelius	Quintus Fabius	269
484	Caeso Fabius	Lucius Aemilius	270
483	Marcus Fabius	Lucius Valerius	271
482	Quintus Fabius 2	Gaius Julius	272
481	Caeso Fabius 2	Spurius Furius	273
480	Marcus Fabius	Gnaeus Manlius	274
479	Caeso Fabius 3	Titus Verginius	275
478	Lucius Aemilius 2	Gaius Servilius	276
477	Gaius Horatius	Titus Menenius	277
476	Aulus Verginius	Spurius Servilius	278
475	Gaius Nautius	Publius Valerius	279
474	Lucius Furius	Gaius Manlius	280
473	Lucius Aemilius	Opiter Verginius	281
472	Lucius Pinarius	Publius Furius	282
471	Appius Claudius	Titus Quinctius	283
470	Lucius Valerius 2	Titus Aemilius	284
469	Titus Numicius	Aulus Verginius	285
468	Titus Quinctius 2	Quintus Servilius	286
467	Tiberius Aemilius 2	Q. Fabius	287
466	Q. Servilius	Sp. Postumius	288
465	Q. Fabius 2	T. Quinctius (ローマ人口124,214)	289
464	Aul. Postumius	Sp. Furius 3	290
463	L. Aebutius	P. Servilius	291
462	T. Lucretius Tricipitinus	T. Veturius Geminus	292
461	P. Volumnius	Serv. Sulpicius	293
460	C. Claudius	P. Valerius 2	294
459	Q. Fabius 3	L. Cornelius (ローマ人口132,049)	295

458	L.Minucius	C.Nautius 2	296
457	Q.Minucius	C.Horatius	297
456	M.Valerius	Sp. Virginius	298
455	T. Romilius	C. Veturius	299
454	Sp. Tarpeius	A. Aterius	300
453	P. Curiatius	Sex. Quintilius	301
452	C. Menenius	P. Cestius Capitolinus ( XII TABLES)	302
451	<u>DECEMVIRI</u> (Ap. Claudius, T. Genucius, P. Cestius, etc.)		303
450	<u>DECEMVIRI</u> (Ap. Claudius, Q. Fabius Vibulanus, M. Cornelius etc.)		304
449	Valerius Potitus	M. Horatius Barbatus	305
448	Lart. Herminius	T. Virginius	306
447	M. Geganius Macerinus	C. Julius	307
446	T. Quintius Capitolinus	Agrippa Furius	308
445	M. Genucius	C. Curtius	309
444	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (三カ月) (A. Sempronius, L. Atilius, T. Cloelius)		310
	L. Papius Mugillanus	S. Sempronius Atratinus	
443	M. Geganius Macerinus 2	T. Quintius Capitolinus 2	311
	( CENSOR の制度が設置される)		
442	M. Fabius Vibulanus	Postumius Aebutius Cornicen	312
441	C. Furius Pacilus	M. Papius Crassus	313
440	P. Geganius Macerinus	L. Menenius Lanatus	314
439	T. Quintius Capitolinus 3/	Agrippa Menenius Lanatus	315
438	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (Mamercus Aemilius, T. Quintius, L. Julius)		316
437	M. Geganius Marcerinus	Sergius Fidenas	317
436	M. Cornelius Maluginensis	L. Papius Crassus	318
435	C. Julius	L. Virginius	319
434	C. Julius 2	L. Virginius 2	320
433	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (M. Fabius Vibulanus, M. Fossius, L. Sergius Fidenas)		321

432	<u>MILITARY TRIUBNES</u> (L. Pinarius Mamercus, L. Furius Medullinus, Sp. Postumius Albus)	322
431	T. Quintius Cincinnatus C. Julius Manto (Postumius DICTATOR)	323
430	C. Papirius Crassus L. Julius	324
429	L. Sergius Fidenas 2 Host. Lucret. Tricipitinus	325
428	A. Cornelius Cossus T. Quintus Pennus 2	326
427	Servilius Ahala L. Papirius Mugillanus 2	327
426	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (T. Quintus Pennus, C. Furius, M. Postumius, A. Corn. Cossus)	328
425	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (A. Sempronius Atratinus, L. Quin- tus Cincinnatus, L. Furius Medullinus, L. Horat. Barbatus)	329
424	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (A. Claudius Crassus etc.)	330
423	C. Sempronius Atratinus A. Fabius Vibulanus	331
422	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (L. Manlius Capitolinus, etc.)	332
421	Numerius Fabius Vibulanus T. Q. Capitolinus	333
420	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (L. Q. Cincinnatus 3, L. Furius Medullinus 2, M. Manlius, A. Sempronius Atratinus)	334
419	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (A. Menenius Lanatus, etc.)	335
418	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (L. Sergius Fidenas, M. Papirius Mugillanus, C. Servilius)	336
417	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (A. Menenius Lanatus 2, etc.)	337
416	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (A. Sempronius Atratinus 3, etc.)	338
415	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (P. Cornelius Cossus, etc.)	339
414	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (Cn. Corn. Cossus, etc.)	340
413	M. Corn. Cossus L. Furius Medullinus	341
412	Q. Fabius Ambustus C. Furius Pacilus	342
411	M. Papirius Atratinus C. Nautius Rutilus	343
410	Mamercus Aemilius C. Valerius Potitus	344

409	Cn.Corn.Cossus	L.Furius Medullinus	345
	(この年はじめて、平民から quaestors が選ばれた。)		
408	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(C. Julius etc.)	346
407	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(L. Furius Medullinus etc.)	347
406	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(P.& Cn.Corenlli Cossi, etc.)	348
405	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(T.Quintius Capitolinus etc.)	349
404	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(C.Valerius Potitus etc.)	350
403	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(Manlius Aemilius Mamercinus etc.)	351
402	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(Servilius Ahala, etc.)	352
401	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(L.Valerius Potitus 4, M. Furius Camillus 2 etc.)	353
400	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(Licinius Calvus etc.)	354
399	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(M.Veturius etc.)	355
398	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(L.Valerius Potitus 5, M. Furius Camillus 3 etc.)	356
397	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(L.Julius Iulus etc.)	357
396	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(P.Licinius etc.)	DICTATOR
	(Camillus)		
395	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(P.Corn. Cossus, etc.)	359
394	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(M.Furius Camillus etc.)	360
393	L.Lucretius Flaccus	Servius Sulpicius Camerinus	361
392	L.Valerius Potitus	M.Manlius	362
391	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(L.Lucretius etc.)	363
390	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(3 Fabii)	364
	(ローマ、ガリア人に破れ、ローマ市は占領されるが、Camilius が DICTATOR となり、ガリア軍を破る。)		
389	<u>MILITARY TRIBUNES</u>	(L.Valerius Publicola 3, L.Virginus etc.)	365

	<u>  </u> DICTATOR (Camillus)	
388	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (T.Q. Cincinnatus, Q. Servilius Fidenas, L. Julius Iulus)	366
387	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (L. Papirius, Cn. Sergius, L. Aemilius etc.)	367
386	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (M. Furius Camillus etc.)	368
385	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (A. Manlius, P. Cornelius etc.)	369
384	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (Ser. Corn. Maluginensis, P. Valerius Potitus, M. Furius Camillus)	370
383	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (L. Valerius, A. Manlius, Serv. Sulpicius etc.)	371
382	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (Sp. & L. Papirii etc.)	372
381	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (L. Furius Camillus, L. Furius etc.)	373
380	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (L. & P. Valerii)	374
379	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (C. Manlius etc.)	375
378	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (Sp. Furius etc.)	376
377	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (L. Aemilius etc.)	377
376		378
375		379
374	(五年間、無政府状態。コンスルも MILITARY TRIBUNES も	380
373	選ばれず。TRIBUNES OF THE PEOPLE, L. Sextinus, C. Licinius Calvus Stolo)	381
372		382
371	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (L. Furius etc.)	383
370	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (Q. Servilius, C. Veturius etc.)	384
369	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (L. Q. Capitolinus, Sp. Servilius etc.)	385
368	DICTATOR (Camillus)	386

367	<u>MILITARY TRIBUNES</u> (A.Cornelius Cossus, L.Vetur. Carssus etc.)		387
	(Camillus ガリア人を撃破。この年から以後コンスルの一人は平民 から選ばれるという原則ができる。しかし、これは必ずしも守られて いない)		
366	L.Aemilius (貴族)	L.Sextius (平民)	388
	(Praetor や Curulis aedilis の役職が、元老院によって平民にも あたえられることとなる)		
365	L.Genucius	Q.Servilius	389
364	L.Sulpicius Peticus	C.Licinius Stolo	390
363	Cn.Genucius	L.Aemilius	391
362	Q.Serv.Ahala 2	L.Genucius 2	392
361	C.Sulpicius 2	C.Licinius 2	393
360	C.Petilius Balbus	M.Fabius Ambustus	394
359	M.Popilius Laenas	C.Manlius	395
358	C.Fabius	C.Plautius	396
357	C.Marcus Rutilus	Cn.Manlius 2	397
356	M.Fabius Ambustus 2	M.Popilius Laenas 2	398
	(はじめて dictator が平民から選ばれる)		
355	C.Sulpicius Peticus (貴族)	M.Valerius Populicola 2 (平民)	399
354	M.Fabius Ambustus 3	T.Quintius	400
353	C.Sulpicius Peticus 4	M.Valerius Populicola 3	401
352	M.Valerius Publicola 4	C.Marcus Rutilus 2	402
351	Q.Sulpicius Peticus 5	T.Q. Pennus	403
	(Censor が平民から選ばれる)		
350	M.Popilius Laenas 3	L.Corn.Scipio	404
349	L.Furius Camillus	Ap.Claudius Crassus	405
348	M.Valerius Corvus	M.Popilius Laenas 4	406
347	T.Manlius Torquatus	C.Plautius	407



346	M.Valerius Corvus 2	C.Paetilius	408
345	M.Fabius Dorso	Ser.Sulpicius Camerinus	409
344	C.Marcus Rutilus 3	T.Manlius Torquatus 2	410
343	M.Valerius Corvus 3	A.Cornelius Cossus	411
342	C.Marcus Rutilus 4	Q.Servilius	412
341	C.Plautinus	L.Aemilius Mamercinus	413
340	T.Manlius Torquatus 3	P.Decilus Mus	414
339	T.Aemilius Mamercinus	Q.Publius Philo	415
338	L.Furius Camillus	C.Maenius	416
337	C.Sulpicius Longus	P.Aelius Paetus	417
336	L.Papirius Crassus	Caeso Duillius	418
335	M.Valerius Corvus	M.Atilius Regulus	419
334	T.Veturius Calvinus	Sp.Postumius	420
333	L.Papirius Cursor	C.Paetilius Libo	421
332	A.Cornelius 2	Cn.Domitus	422
331	M.Claudius Marcellus	C.Valerius Potitus	423
330	L.Papirius Carassus	C.Plautius Venno	424
329	L.Aemilius Mamercinus 2	C.Plautius	425
328	P.Plautius Proculus	P.Corn.Scapula	426
327	L.Corn.Lentulus	Q.Publicius Philo	427
326	C.Paetilius	L.Papirius Mugillanus	428
325	L.Furius Camillus 2	D.Jun.Brutus Scaeva	429
324	<u>DICTATOR</u> (L.Papirius Cursor)		430
323	L.Sulpicius Longus	Q.Aulius Cerretanus	431
322	Q.Fabius	L.Fulvius	432
321	T.Veturius Calvinus 2	S.Postumius Albinus 2	433
320	L.Papirius Cursor 2	Q.Publilius Philo 2	434
319	L.Papirius Cursor 3	Q.Aulius Cerretanus 2	435

318	M. Fossius Flaccinator	L. Plautius Venno	436
317	C. Jun. Bubulcus	L. Aemilius Barbula	437
316	Sp. Nautius	M. Popilius	438
315	L. Papirius Cursor 4	Q. Publicius Philo 3	439
314	M. Paetilius	C. Sulpicius	440
313	L. Papirius Cursor 5	C. Jun. Bubulcus 2	441
312	M. Valerius	P. Decius	442
311	C. Jun. Bubulcus 3	Q. Aemilius Barbula 2	443
310	Q. Fabius 2	C. Martius Rutilius	444
309	<u>DICTATOR</u> (L. Papirius Cursor)		445
308	Q. Fabius 3	P. Decius 2	446
307	Appius Claudius	L. Volumnius	447
306	P. Corn. Arvina	Q. Marcius Tremulus	448
305	L. Postumius	T. Minucius	449
304	S. Sulpicius Saverrio	Sempronius Sophus	450
303	L. Genucius	Ser. Cornelius	451
302	M. Livius	M. Aemilius	452
301	Q. Fabius Maximus Rullianus / M. Val. Corvus		453
	(consulsではなくてdictatorsだったとする説がある。)		
300	M. Valerius Corvus	Q. Apuleius	454
299	M. Fulvius Paetinus	T. Manlius Torquatus	455
298	L. Cornelius Scipio	Cn. Fulvius	456
297	Q. Fabius Maximus 4	P. Decius Mus 3	457
296	L. Volumnius 2	Ap. Claudius 2	458
295	Q. Fabius 5	P. Decius Mus 4	459
294	L. Postumius Megellus	M. Atilius Regulus	460
293	L. Papirius Cursor	Sp. Carvilius	461
292	Q. Fabius Gurges	D. Jun. Brutus Scaeva	462

291	L. Postumius 3	C. Jun. Brutus	463
290	P. Corn. Rufinus	M. Curius Dentatus	464
289	M. Valerius Corvinus	Q. Caedicius Noctua	465
288	Q. Marcius Tremulus	P. Corn. Arvina	466
287	M. Claudius Marcellus	C. Nautius	467
286	M. Valerius Potitus	C. Aelius Paetus	468
285	C. Claudius Caenina	M. Aemilius Lepidus	469
284	C. Servilius Tucca	Caecilius Metellus	470
283	P. Corn. Dolabella	C. Domitius Calvinus	471
282	Q. Aemilius Papus	C. Fabricius Luscinus	472
281	L. Aemilius Barbula	Q. Mucius	473
	(Pyrrhus, Tarentumの援助に赴く。)		
280	P. Valerius Laevinus	Tib. Cornucanius	474
	(ローマの人口 272,222)		
279	P. Sulpicius Saverrio	P. Decius Mus	475
	(Roma, Pyrrhusと戦う。)		
278	C. Fabricius Luscinus 2	Q. Aemilius Papus 2	476
277	P. Corn. Rufinus	C. Jun. Brutus	477
276	Q. Fabius Maximus Gurges 2 /	C. Genucius Clepsina	478
275	M. Curius Dentatus 2	L. Corn. Lentulus	479
	(Pyrrhus, Romaに破れる。)		
274	M. Curius Dentatus 3	Serv. Corn. Merenda	480
273	C. Fabius Dorso	C. Claudius Caenina 2	481
272	L. Papirius Cursor 2	Sp. Carvilius 2	482
271	L. Genucius	C. Quintilius	483
270	C. Genucius	Cn. Cornelius	484
269	Q. Ogulinus Gallus	C. Fabius Pictor	485
268	P. Sempronius Sophus	Ap. Claudius Crassus	486
267	M. Attilius Regulus	L. Julius Libo	487

266	Numerius Fabius	D. Junius	488
265	Q. Fabius Gurgus 3	L. Mamilius Vitulus	489
264	Ap. Claudius Caudex	M. Fulvius Flaccus (ポエニ戦開始)	490
263	M. Valerius Maximus	M. Otacilius Crassus	491
262	L. Postumius Gemellus	Q. Mamilius Vitulus	492
261	L. Valerius Flaccus	T. Otacilius Crassus	493
260	Cn. Corn. Scipio Asina	C. Duillius	494
	(ローマは 120 のガレー船を、2 カ月で建造する。)		
259	L. Corn. Scipio	C. Aquilius Florus	495
258	A. Attilius Calatinus	C. Sulpicius Paterculus	496
257	C. Attilius Regulus	Cn. Corn. Blasio	497
256	L. Manlius Vulso	Q. Caedicius	498
255	Serv. Flavius Paetinus Nobilior/M. Aemilius Paulus		499
254	Cn. Corn. Scipio Asina 2/A. Attilius Calatinus 2		500
253	Cn. Servilius Caepio	C. Sempronius Blaesus	501
252	C. Aurelius Cotta	P. Servilius Geminus	502
	(戦いに動員できる市民の数：297,797)		
251	L. Caecilius Metellus 2	C. Furius Pacilus	503
250	C. Attilius Regulus 2	L. Manlius Volso 2	504
249	P. Clodius Pulcher	L. Jun. Pullus	505
248	C. Aurelius Cotta 2	P. Servilius Geminus 2	506
247	L. Caecilius Metellus 3	Num. Fabius Buteo	507
	(ローマ人口 252,222)		
246	M. Otacilius Crassus 2	M. Fabius Licinius	508
245	M. Fabius Buteo	C. Attilius Balbus	509
244	A. Manlius Torquatus 2	C. Sempronius Blaesus	510
243	C. Fundanius Fundulus	C. Sulpicius Gallus	511
242	C. Lutatius Catulus	A. Postumius Albinus	512

241	Q.Lutatius Corco	A.Manlius Atticus (ポエニ戦終了)	513
	(第 39 回目人口調査、ローマ人口 260,000 人)		
240	C.Claudius Centho	M.Sempronius Tuditanus	514
239	C.Mamilius Turinus	Q.Valerius Falto	515
238	T.Sempronius Gracchus / P.Valerius Falto		516
237	L.Corn.Lentulus Caudinus / Q.Fulvius Flaccus		517
236	P.Corn.Lentulus Caudinus / Licinius Varus		518
235	C.Attilius Balbus 2	T.Manlius Torquatus	519
234	L.Postumius Albinus	Sp.Carvilius Maximus	520
233	Q.Fabius Maximus Verrucosus / M.Pomponius Matho		521
232	M.Aemilius Lepidus	M.Publicius Malleolus	522
231	M.Pomponius Matho 2	C.Papirius Maso	523
230	M.Aemilius Barbula	M.Junius Pera	524
229	L.Postumius Albinus 2	Cn.Fulvius Centumalus	525
228	Sp.Carvilius Maximus 2	Q.Fabius Maximus	526
227	P.Valerius Flaccus	M.Attilius Regulus	527
226	M.Valerius Messala	L.Apulius Fullo	528
	(ローマの戦闘可能人口 770.000 人)		
225	L.Aemilius Papus	C.Attilius Regulus	529
224	T.Manlius Torquatus 2	Q.Fulvius Flaccus 2	530
223	C.Flaminius	P.Furius Philus	531
222	M.Claudius Marcellus	Cn.Corn.Scipio Calvus	532
221	P.Cornelius	M.Minucius Rufus	533
	(Hannibal スペインに入る)		
220	L.Veturius	C.Lutatius	534
219	M.Livius Salinator	L.Aemilius Paulus	535
218	P.Corn.Scipio	P.Sempronius Longus	536
	(Hannibal イタリアに攻め込み第二次ポエニ戦争となる。205年まで)		

217	Cn. Servilius	C. Flaminius 2	537
	DICTATOR - Fabius. (Trasimenus 湖の戦い)		
216	C. Terentius Varro	L. Aemilius Paulus 2	538
	(カンネの戦い。ローマ、ハンニバルに大敗するが、和平を拒否)		
215	Ti. Sempronius Gracchus	Q. Fabius Maximus 2	539
	(Carthago, Macedonia と同盟を結び、ローマを東西から挟撃する体制を取る)		
214	Q. Fabius Maximus 3	M. Claudius Marcellus 2	540
213	Q. Fabius Maximus 4	Ti. Sempronius Gracchus 2	541
212	Q. Fulvius Flaccus	Ap. Claudius Pulcher	542
211	Cn. Fulvius Centumalus	P. Sulpicius Galba	543
210	M. Claudius Marcellus 3	/ M. Valerius Laevinus 2	544
209	Q. Fabius Maximus 5	Q. Fulvius Flaccus 4	545
208	M. Claudius Marcellus 3	T. Quintius Crispinus	546
207	M. Claudius Nero	M. Livius Salinator 2	547
206	L. Venturius	Q. Caecilius	548
205	P. Cornelius Scipio	P. Licinius Crassus	549
204	M. Cornelius Cethegus	P. Sempronius Tuditanus	550
	(Scipio アフリカに上陸、ローマの人口 215,000戸)		
203	Cn. Servilius Caepio	C. Servilius Geminus	551
202	M. Servilius	Ti. Claudius	552
	(ザマの戦い)		
201	Cn. Corn. Lentulus	P. Aelius Paetus	553
	(第二次ポエニ戦争終了)		
200	P. Sulpicius Galba 2	C. Aurelius Cotta	554
	(対マケドニア戦争。195年まで)		
199	L. Corn. Lentulus	P. Villius Tapulus	555
198	Sex. Aelius Paetus	T. Quintius Flaminius	556

197	C.Corn.Cethegus	Q.Minucius Rufus	557
	(対マケドニア戦争終了)		
196	L.Furius Purpureo	M.Claudius Marcellus	558
195	L.Valerius Flaccus	M.Porcus Cato	559
194	P.Corn.Scipio Africanus 2	T.Sempronius Longus	560
193	L.Cornelius Merula	Q.Minucius Thermus	561
192	L.Quintius Flaminius	Cn. Domitius	562
191	P.Corn.Scipio Nasica	Manlius Acilius Glabrio	563
190	L.Corn.Scipio	C.Laelius	564
189	M.Fulvius Nobilior	Cn.Manlius Vulso	565
188	M.Valerius Messala	C.Livius Salinator	566
187	M.Aemilius Lepidus	C.Flaminius	567
186	Sp.Postumius Albinus	Q.Marcus Philippus	568
	(Bacchanalia の祭り禁止)		
185	Ap.Claudius Pulcher	L.M. Sempronius Tuditanus	569
184	P.Claudius Pulcher	L.Porcus Licinius	570
183	M.Claudius Marcellus	Q.Fabius Labeo	571
182	M.Baebius Tamphilus	L.Aemilius Paulus	572
181	P.Cornelius Cethegus	M.Baebius Tamphilus 2	573
180	A.Postumius Albinus Luscus	C.Calpurnius Piso	574
179	Q.Fulvius Flaccus	L.Manlius Acidinus	575
178	M. Junius Brutus	A.Manlius Vulso	576
177	C.Claudius Pulcher	T. Sempronius Gracchus	577
176	Cn.Corn.ScipioHispalus	Q. Petillius Spurius	578
175	P.Mucius	M.Aemilius Lepidus 2	579
174	Sp.Postumius Albinus	Q.Mucius Scaevola	580
173	L.Postumius Albinus	M.Popilius Laenas	581
172	C.Popilius Laenas	P.Aelius Ligur	582
171	P.Licinius Crassus	C.Cassius Longinus (マケドニア戦)	583

170	A.Hostilius Mancius	A.Atilius Serranus	584
169	Q.Marcius Philippus 2	Cn. Servilius Caepio	585
168	L.Aemilius Paulus	C.Licinius Crassus	586
	(マケドニアの Perseus 敗れ、Paulus によって捕虜となる。 マケドニア 戦終了)		
167	Q. Aelius Paetus	M. Junius Pennus	587
166	M. Claudius Marcellus	C. Sulpicius Galba	588
165	Cn. Octavius Nepos	T. Manlius Torquatus	589
164	Aulus Manlius Torquatus/Q. Cassius Longus		590
163	Ti. Sempronius Gracchus/M. Juvencius Phalna		591
162	P. Cornelius Scipio Nasica/C. Marcius Figulus		592
161	M. Valerius Messala	C. Fannius Strabo	593
160	L. Anicius Gallus	M. Cornelius Cethegus	594
159	C. Cornelius Dolabella	M. Fulvius Nobilior	595
158	M. Aemilius Lepidus	C. Popilius Laenas	596
157	Sextus Julius Caear	L. Aurelius Orestes	597
156	L. Cornelius Lentulus	C. Marcius Figulus 2	598
155	P. Cornelius Scipio Nasica 2 / M. Claudius Marcellus 2		599
154	Q. Opimius Nepos	L. Postumius Albinus	600
153	Q. Fulvius Nobilior	T. Amius Luscus	601
152	M. Claudius Marcellus 3 / L. Valerius Flaccus		602
151	L. Licinius Lucullus	A. Postumius Albinus	603
150	T. Quintius Flaminius	M. Acilius Balbus	604
149	L. Marcius Censorinus	M. Manlius Nepos (マケドニア戦 149-148)	605
148	Sp. Postumius Albinus	L. Calpurnius Piso	606
147	P. Cornelius Scipio	C. Livius Drusus	607
146	Cn. Cornelius Lentulus	L. Mummius (Macedonia, Achaia 属州化)	608



145	Q.Fabius Aemilianus	L.Hostilius Mancinius	609
144	Servius Sulpicius Galba	L.Aurelius Cotta	610
143	Ap.Claudius Plucher	Q.Caecilius Metellus Macedonicus	611
142	L.Metellus Calvus	Q.Fabius Maximus Servilianus	612
141	Q.Pompeius	C.Servilius Caepio	613
140	C.Laelius Sapiens	Q.Servilius Caepio	614
139	M.Popilius Laenas	C.Calpurnius Piso	615
138	P.Cornelius Scipio Nasica/D.	Junius Brutus	616
137	M.Aemilius Lepidus	C.Hostilius Mancinus	617
136	P.Furius Philus	Sex.Atilius Serranus	618
135	Ser.Fulvius Flaccus	Q.Calpurnius Piso	619
134	P.Corn. Scipio 2	C.Fulvius Flaccus	620
133	P.Mucius Scaevola	L.Calpurrius Piso Frugi	621
132	P. Popilius Laenas	P.Rupillus	622
131	P.Licinius Crassus	L.Valerius Flaccus	623
130	C.Claudius Pulcher	M.Perpenna	624
129	C.Sempronius Tuditanus /M.	Aquilius Nepos	625
128	Cn.Octavius Nepos	T.Annius Luscus	626
127	L.Cassius Longus	L.Cornelius Cinna	627
126	L.Aemilius Lepidus	L.Aurelius Orestes	628
125	M.Plautius Hypsaeus	M.Fulvius Flaccus	629
124	C.Cassius Longinus	L.Sextius Calvinus	630
123	Q.Caecilius Metellus	T.Quintius Flaminius	631
122	C.Fannius Strabo	Cn.Domitius Ahenobarbus	632
121	Lucius Opimius	Q.Fabius Maximus	633
120	P.Manlius Nepos	C.Papirius Carbo	634
119	L.Caecilius Metellus Calvus /	L.Aurelius Cotta	635
118	M.Porcius Cato	Q.Marcus Rex	636

117	L.Caecilius Metellus	Q.Mucius Scaevola	637
116	C.Licinius Geta	Q.Fabius Maximus Eburnus	638
115	M.Caecilius Metellus	M. Aemilius Scaurus	639
114	M.Acilius Balbus	C.Porcius Cato	640
113	C.Caecilius Metellus	Cn.Papirius Carbo	641
112	M.Livius Drusus	L.Calpurnius Piso	642
111	P.Scipio Nasica	L.Calpurnius Bestia (ユグルタ戦)	643
110	M.Minucius Rufus	Sp.Postumius Albinus	644
109	Q.Caecilius Metellus	M. Junius Silanus	645
108	Servius Sulpicius Galba	M.Aurelius Scaurus	646
107	C.Marius	L. Cassius	647
106	C.Atilius Serranus	Q.Servilius Caepio	648
105	P.Rutilius Rufus	Corn.Manlius Maximus	649
	(ユグルタ戦終了)		
104	C.Marius 2	C.Flavius Fimbria	650
103	C.Marius 3	L.Aurelius Orestes	651
	(奴隷反乱 - 99)		
102	C.Marius 4	Q.Lutatius Catulus	652
101	C.Marius 5	M. Aquilius	653
100	C.Marius 6	L.Valerius Flaccus	654
99	M. Antonius	A.Postumius Albinus	655
	(奴隷反乱鎮圧)		
98	L. Caecilius Metellus Nepos / T.Didius		656
97	Cn. Corn. Lentulus	P.Licinius Crassus	657
96	Cn. Domitius Ahenobarbus / C.Cassius Longinus		658
95	L.Licinius Crassus	Q.Mucius Scaevola	659
94	C.Coelius Caldus	L.Domitius Ahenobarbus	660
93	C.Valerius Flaccus	M.Herennius	661
92	C.Claudius Pulcher	M.Perpenna	662

- 91 L.Marcus Philippus Sex. Julius Caesar 663
- 90 M. Julius Caesar P.Rutulius Rufus 664  
(全イタリア人に市民権を与える。ユリア法成立)
- 89 Cn.Pompeius Strabo L.Porcius Cato 665
- 88 L.Cornelius Sulla Q.Pompeius Rufus 666  
(対Mitridates 戦争開始 - 84)
- 87 Cn. Octavius L.Cornelius Cinna 667
- 86 C.Marius 7 L.Cornelius Cinna 2 668  
(対Mithridates戦。Marius 死亡。以後 Cinna, 事実上 dictator となる - 84)
- 85 L.Cornelius Cinna 3 Cn.Papirius Carbo 669
- 84 L.Cornelius Cinna 4 Cn.Papirius Carbo 2 670
- 83 L.Corn.Scipio Asiaticus/C.Norbanus (第二次 Mithridates 戦) 671
- 82 C.Marius Cn.Papirius Carbo 3 672  
(ローマでMariusとSullaの抗争。Sulla dictator になり市民を虐殺)  
(Mithridates 戦争終了)
- 81 M.Tullius Decula Cn.Cornelius Delabella 673  
(Sulla tribunes の権限を縮小。Pompeius Africa で戦勝)
- 80 L.Corn.Sulla Felix 2 Q.Caecilius Metellus Pius 674
- 79 P.Servilius Vatia Ap.Claudius Pulcher 675  
(Sulla 自発的に dictator を退く)
- 78 M.Aemilius Lepidus (民衆派) Q.Lutatius Catulus 676  
(Sulla の死。Lepidus, Catulus に敗れ、その北イタリアの兵力をPompeius 一掃)
- 77 D.Junius Brutus Mamercus Aemilius Lepidus 677  
Livianus

- (Pompeius スペインの Sertorius に敗れ、Sertorius スペインに自領を確保)
- 76 Cn.Octavius M.Scribonius Curio 678  
(Sertorius 撃破される。Crassus と Pompeius, 護民官の権利回復)
- 75 Cn.Octavius C.Aurelius Cotta 679  
(Mithridates と Sertorius 同盟条約を締結。第三次 Mithridates 戦争)
- 74 L.Licinius Lucullus M.Aurelius Cotta 680  
(Lucullus, Mithridates 軍を撃退し Pontus を占領。奴隸反乱)
- 73 M.Terentius Varro Lucullus C.Cassius Varus Spartacus 681  
(Spartacus 指揮下の gadiators 反乱に成功。)
- 72 L.Gellius Poplicola Cn.Corn. Lentulus Clodianus 682  
(Spartacus、ローマの将軍達を撃破。Sertorius 部下に殺害される)
- 71 Cn.Aufidius Orestes P.Corn.Lentulus Sura 683  
(Crassus, Apulia で Spartacus を破り、殺害する。Censor, 不誠実な元老院を追放する特権を回復)
- 70 M.Licinius Crassus Cn.Pompeius Magnus 684  
(Parthia の内乱平定、統一回復。ローマの人口、900,000 人)
- 69 Q.Hortensius 2 Q.Caecilius Metellus 685  
(Lucullus, Armenia 王 Tigranes を破り、Parthia 進攻を企画)
- 68 Q.Marcus Rex L.Caecilius Metellus 686  
(Lucullus, Mithridates と Tigranes の連合軍を破る)
- 67 M.Acilius Glabrio C.Calpurnius Piso 687  
(Lucullus 部下の不評をかい、兵の一部は逃亡。Pompeius 海賊の活動を鎮圧し、Sicilia を占領)
- 66 M.Aemilius Lepidus L.Volcatus Tullus 688

(Pompeius, Lucullus の後を継ぎ、Mithridates を黒海東岸に破り Crimea に追う。Pompeius, アジア全域の軍事・行政の指導権を付与される)

- 65 L. Aurelius Cotta      L. Manlius Torquatus      689  
(Pompeius, Asia と Syria の統治方式を再編成)
- 64 L. Julius Caesar      C. Martius Figulus      690  
(Pompeius, Jerusalem を占領、Judea を平定)
- 63 M. Tullius Cicero      C. Antonius      691  
(Catilina の陰謀。ローマ市民の不平分子を集め、蜂起を企てるが Cicero に破れる。Crimea で Mithridates 自殺)
- 62 D. Junius Silanus      L. Licinius Muraena      692  
(Pompeius 海賊を平定、パルチアの Mithridates, アルメニアの Tigranes, ユダヤの Aristobulus を鎮圧、シリア、小アジアの行政再組織終わり、東方ローマ領に 4 属州と 4 保護王国成立。元老院はこれを認めず)
- 61 M. Puppius Piso      M. Valerius Messala Niger      693
- 60 L. Afranius      Q. Metellus Celer      694  
(Crassus, Pompeius, Caesar による第一回三頭政治成立)
- 59 C. Jul. Caesar      M. Calpurnius Bibulus      695  
(Caesar 同僚のコンスルの fasces を破壊し、ひとりコンスルになり、五年間のガリア支配権を獲得。Caesar, Campania の土地を Pompeius の部下に分譲)
- 58 C. Calpurnius Piso      A. Gabinius Paulus      696  
(Cicero, Clodius により追放される。Cato, Cyprus 王、Ptolemaeus を討つ。Caesar, Gallia 征服に着手、-51)
- 57 P. Corn. Lentulus Spinther / Q. Caecilius Metellus Nepos 697  
(護民官 Milo, Cicero を召還、Caesar の土地配分を非難する)
- 56 Cn. Corn. Lentulus Marcellinus / L. Marcius Philippus 698

- 55 Cn.Pompeius Magnus 2/M.Licinius Crassus 2 699  
 (Crassus, Parthia 遠征, Syria の支配権を握る。Caesar のガリア統治五年間延長)
- 54 L.Domitius Ahenobarbus/Ap.Claudius Pulcher 700  
 (Caesar, Britannia に侵入、王を破る)
- 53 Cn.Domitius Calvinus M.Valerius Messala 701  
 (Caesar, Germania に侵入、Crassus, Mesopotamia で Parthia 軍に殺害される。)
- 52 Cn.Pompeius Magnus 3 (Q.Caecilius Metellus Pius Scipio) 702  
 (単独のコンスルとなる。ガリア全地域で諸部族蜂起。Caesar これを鎮圧)
- 51 Ser.Sulpicius Rufus M.Claudius Marcellus 703  
 (Caesar, ガリア諸部族の反乱鎮圧続行。Caesar と Pompeius の反目増大)
- 50 L.Aemilius Paulus P.Claudius Marcellus 704  
 (Cicero, Cilicia の Proconsul となる。元老院 Caesar をガリアから召還)
- 49 C.Claudius Marcellus L.Cornelius Lentulus 705  
 (Caesar, Rubicon 川を渡りローマに入り、Pompeius,ギリシャに逃れ、Caesar は Dictator に任命される)
- 48 C.Julius Caesar 2 P.Servilius Isauricus 706  
 (Caesar は Pompeius を Pharsalia に破り、Pompeius はエジプトで殺される。Caesar はエジプトを攻め、王妹 Cleopatra 7世と Ptolemaius 13世の共同統治を組織する)
- 47 Q.Fusius Calenus P.Vatinius 707  
 (Caesar, Pontus, Syria を平定、ローマに帰還)
- 46 C.Julius Caesar 3 M.Aemilius Lepidus 708  
 (Caesar アフリカ、スペインで Pompeius の残党を掃討)

- 45 C. Julius Caesar 4 709  
 (Caesar, ローマに戻り、単独のコンスルとなり、さらに終身の Dictator 兼 Imperator を宣言する)
- 44 C. Julius Caesar 5 M. Antonius 710  
 (Caesar は更に対 Parthia 戦を企画するが、600人以上のローマ人が決起し Cassius Brutus らによって、元老院で殺害される。同僚のコンスル、Antonius が権限を掌握。Caesar の甥、Gaius Octavianus, Campania で兵を挙げる)
- 43 C. Vibius Pansa A. Hirtius 711  
 (Antonius, 公敵とみなされ、Lepidus, Octavianus とともに第二回三頭政治体制を敷き、最高権力を掌握)
- 42 L. Minucius Plancus M. Aemilius Lepidus 2 712  
 (故 Julius Caesar に神の称号が与えられる。Brutus と Cassius はトラキアで共和制護持の兵を挙げ、Octavianus と Antonius の軍と Philippi 戦い敗戦。Antonius は地中海東部の諸属州を領有する)
- 41 L. Antonius P. Servilius Isauricus 2 713  
 (Antonius, Cleopatra と一年をともに過ごす)
- 40 Cn. Domitius Calvinus C. Asinius Pollio 714  
 (Octavianus, Antonius の妻と弟の軍をやぶり、Lepidus の支配する Gallia を手中に収める)
- 39 L. Marcius Censorinus C. Calvisius Sabinus 715  
 (Pompeius の子 Sextus, Sicily に拠り、三頭政治家と和を結ぶ。Antonius, Parthia 攻撃、-36)
- 38 Ap. Claudius Pulcher C. Norbanus Flaccus 716  
 C. Octavianus Q. Pedius  
 (Pompeius の子 Sextus の勢力増大し、Octavianus, Sicilia で Sextus と戦う、-36 B.C.)

- 37 M. Agrippa L. Caninius Gallus 717  
 (Agrippa, Octavianus の命により Sextus 平定にあたる。Sextus は海軍を掌握。Miseunum に港を造る。Tarentum の和約により、Octavianus と Antonius の協力体制ができる)
- 36 L. Gellius Poplicola M. Cocceius Nerva 718  
 (Agrippa, Sextus との海戦に勝つ。Sextus Pompeius の死。Antonius は Parthia 軍に敗れ、Armenia に退く。Antonius, Cleopatra と結婚)
- 35 L. Cornificus Nepos Sex. Pompeius Nepos 719  
 (Lentulus, Octavianus によって排除される。Antonius, Armenia 軍を破り、Alexandria に帰還)
- 34 L. Scribonius Libo M. Antonius 2 720  
 (Octavianus と Antonius はローマ支配地区の覇者となり、Octavianus は東部、Antonius は西部を支配する形となる)
- 33 C. Caesar Octavianus 2 / L. Volcatius Tullus 721  
 (政略結婚をさせられていた Octavianus の妹、Octavia を Antonius は離婚し Cleopatra と正式に結婚。Parthia が Media を征服、ローマ軍を Armenia から排除する。Octavianus コンスルを兼任)
- 32 Cn. Domitius Ahenobarbus / C. Sosius 722  
 (Octavianus と Antonius の対立。Antonius, Octavianus 攻撃の海軍を準備、イタリアと西部諸州は Octavianus 支持)
- 31 C. Caesar Octavianus 3 / M. Valer. Messala Corvinus 723  
 (Actium の戦い。Antonius 敗戦、エジプトに帰り、自殺。Cleopatra も自殺、)
- 30 エジプト、ローマの属州となる。共和制ローマの終結)
- 29 (Janus の神殿が前 235 年以來、はじめて閉鎖される。これはローマの恒久の平和の確立を意味した)



27 (元老院、Octavianus に Augustus の称号をあたえ、  
Octavianus 帝政の組織を確立する)

ローマでは年号をこの表にある二人のコンスルの名で表わした。一例を挙げれば、M.Tull.Cicerone et L.Antonio Consulibus はキケロとアントニウスがコンスルであった年、すなわちローマ暦 691 年 (= 63B.C.) を指す。この呼称はローマ暦 244 年 (= 510 B.C.) から 1294 (541 A.D.) まで続き、同年、ユスティニアヌスによってコンスル制度は前面的に廃止されている。ただし、帝政期には二人のコンスルの上に皇帝が君臨している。任期一年のコンスル制は Julius Caesar の時には、二、三カ月に短縮され、その年には一月一日にコンスルだった者の名が付けられている。Tiberius (A.D. 14-37 在位) や Claudius (41-54 A.D.) もコンスルの任期を短縮している。Commodus (180-192 在位) に到っては、一年間に 25 人もコンスルを変えている。Constantinus 大帝 (324-337 在位) の時に、また昔の任期一年のコンスル制が復活している。

## On the Origin of the Republic Institution in Rome

Ichiro Suzuki

According to Titus Livius, the system of Roman Res Publica (republic; literally "people's thing") was created in 509 B.C. and lasted for 468 years till 31 B.C. Two consuls, elected by the Senate just for one year's term, presided the nation, with some exceptional years when the government was controlled by military tribunes or dictators.

It is surprising that such system which restricted the power of the rulers could have continued for more than four centuries.

Now that modern political systems are placed under the stormy changes in various nations, it seems necessary for us to consider the origin of the democratic institutions of the ancient period and how the Roman government of the Res Publica was obliged to give her place to the regimes of the Emperors.

This article and tables present a general outlook of the development and decay of the Roman democracy.